教えてホームドクター

不正出血が初期症状

増加傾向の子宮体がん

超音波検査で早期発見

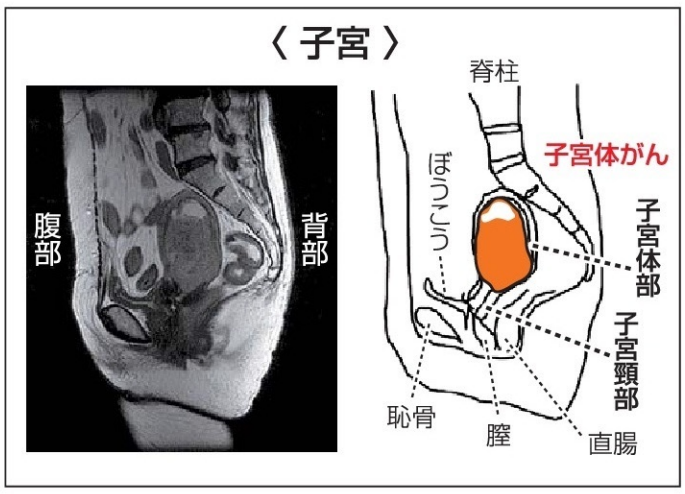
松波総合病院
産婦人科医
今井篤志氏

今回は子宮にできるがんのうち、子宮体がんを考えてみましょう。以前は子宮頸（けい）がんの5分の1の患者数でしたが、生活習慣の欧米化や動物性脂肪の摂取の増加に加え、少子化・晩婚化が進んで、最近では欧米と同じように、子宮頸がんと同程度の発生数までに増加しました。しかし、子宮頸がん予防ワクチンや子宮頸がん検診の公費助成が行き届き、子宮頸がんへの理解が深まってきたことと比べると、子宮体がんという言葉すらあまり知られていません。

子宮は、子宮体部と子宮頸部の二つの部分に分けられます＝図＝。子宮体部は子宮の上部で、妊娠に際して胎児が発育する場所です。子宮頸部は子宮の下部で、膣（ちつ）につながる部分です。妊娠を維持し、分娩（ぶんべん）の時には胎児が通過します。混同する方が多いのですが、それぞれに発生する子宮体がんと子宮頸がんとは、全く異なったがんです。

子宮体がんは40代より増加し、50代が発生のピークでしたが、最近は30代後半から40代の患者さんも急増しています。

子宮体がんは二つのタイプに分けられます。一つは、エストロゲンという女性ホルモンが深く関わっているタイプです。エストロゲンには子宮内膜の増殖を促す作用があります。長期間作用し続けると、子宮内膜が異常に増殖し子宮体がんが発生します。出産したことがない、無排卵性の月経不順がある、エストロゲン製剤だけのホルモン療法を受けている場合です。皮下脂肪でもエストロゲンが作られるので、肥満も子宮体がんの発生を高める要因です。乳がんの術後治療に用いられるタモキシフェンは、子宮に対してはエストロゲンと同じ作用を持つので子宮体がんの危険因子です。多くの子宮体がんは、このエストロゲンが関与するタイプです。



二つ目はエストロゲンと関連なく生じるものです。このようなタイプの子宮体がんはがん関連遺伝子の異常に伴って発生し、比較的高齢者に多くみられます。浸潤や転移の頻度が高く、予後が悪いという特徴があります。

子宮体がん患者さんの約9割が「不正出血」をきっかけに受診し、約6～7割が早期がんで発見されます。毎年婦人科検診を受けていても、1回でも少量の出血があったら、婦人科を受診しましょう。子宮体がんの警告信号かもしれません。

子宮頸がんの検診と同様に子宮内膜の検査も外来でできます。直接、子宮の内部に細い棒状の器具を挿入して細胞を採取して検査する子宮内膜細胞診が一般的です。超音波検査で子宮内膜の厚さを測って判断することも行われます。子宮体がんになると、子宮内膜の厚みが増してくることが多いので、超音波検査は有用な検査の一つです。超音波検査は子宮だけでなく、卵巣・卵管や骨盤内の腫瘍を見つけることもできます。年1回は婦人科検診を受けましょう。（松波総合病院腫瘍内分泌センター長、羽島郡笠松町田代）

無断複製・転載を禁じます